

日米インタープリターズフォーラム

US-Japan Interpreter' s Forum

～日米インタープリテーション研修会 20+1 回記念～

実施報告書

1. 実施概要

日 時：2017年5月14日（日）～15日（月）
場 所：公益財団法人キープ協会清泉寮
主 催：一般社団法人日本インタープリテーション協会
共 催：公益財団法人キープ協会
後 援：環境省
公益財団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団 助成事業

参加者：64名（男31名、女33名）*ゲスト、スタッフ含む

スタッフ：日本インタープリテーション協会実行委員（古瀬浩史、川嶋直、林浩二、増田直広、高田研、西村仁志、森義文、青木雄司、増田由香子、五味愛美、碓井晴子、長谷川幸子、小川結希、右田祐基、本田裕子、山下みさ子、杉田亜紀）*敬称略、順不同
キープ協会（石川昌稔、本田晶、岡野由美、坂川実基、西尾有香音）

通 訳：増田由香子、山田菜緒子、河合佳代子、松下由美、碓井晴子

ゲ ス ト：

●Todd Hisaichi（トッド・ヒサイチ）

アメリカ国立公園局（National Park Service：NPS）のレンジャーになる夢を叶えるため、2004年に市民権を取得。全米各地の国立公園で働いた経験を持ち、現在はカリフォルニア州のミューアウッズ国立公園のインタープリターとして活躍。大阪府出身。

●Maia Browning（マイア・ブラウニング）

NPSでインタープリターとして働き始めた後、展示や博物館管理の仕事を15年行い、その後は研修開発部で職員研修や新任所長アカデミーでのトレーニングを担当。またジョージア公園運営の仕事にも携わる。日米インタープリテーション研修を第1回から現在まで担当。2010年にNPSを退職。

●Jack Spinnler（ジャック・スピンラー）

32年間NPSで勤務し、内20年間をインタープリテーション計画や野外展示の専門部署であるハーパスフェリーセンターに勤務。30以上の公園ユニットの長期インタープリテーション計画や500以上の野外展示の計画に携わる。2008年に退職し、現在はNPSのインタープリテーション計画のコンサルタント、基礎研修の講師などを行っている。

2. 開催にあたって

日本インタープリテーション協会 代表理事 古瀬浩史

日米インタープリテーション研修会は、日本の小さな非営利団体である日本インタープリテーション協会が、アメリカの国立公園局とのパートナーシップによって 20 年以上に渡って継続してきた「奇蹟のような」ワークショップです。それを可能にした根底には、国が違って共通しているインタープリター・スピリットのようなものがあるように感じます。

このワークショップの始まりは、2013 年に急逝された小林毅氏が 1990 年代初頭に、個人でグランド・キャニオン国立公園を訪れたことに始まっています。氏が当時全米に 3 つほどあったレンジャートレーニングセンターの一つであるオルライト・トレーニング・センターを訪ね、「日本人向けのインタープリテーションの研修会ができないものか・・・」と相談したところ、対応してくれたレンジャーから「できると思う」との口約束をもらったのです。小林さんは帰国後さっそく準備をはじめました（そのころはインタープリテーション協会も設立されていませんでした）。アメリカで話をした担当者が異動されるなど、たくさんのハードルがありましたが、1995 年に記念すべき第 1 回が行われました。その時にトレーナーとして対応してくださったのが、今回のゲストでもあるマイア・ブラウニングさんです。

その後、アメリカ政府の予算成立が遅れて国立公園が一時閉鎖されて中止になることがあったり、文化の違いから来るたくさんの齟齬があったとおもいます。しかし、私たちは回を重ねる毎に、インタープリターに通底する「思い」のようなものを互いに確認し、友情を深めてきました。マイアさんが、新たな強力なスタッフとして、日系アメリカ人として初めて国立公園長を務めたジェリー・シモダさん、それから、当時全米のレンジャー・トレーニングの中核にいらしたジョン・タイラーさんなど、素晴らしいスタッフを迎えてくださったことも非常に大きい出来事でした。現在は、国立公園局国際部のルディ・ダレッサンドロさん、そして日本人でありながら NPS のレンジャーとして活躍されているトッド・ヒサイチさんなど、多くの友人とともにこの事業を継承しています。特にルディ・ダレッサンドロさんは、今回残念ながらお迎えすることができませんでしたが、今回のワークショップに多大なご協力をいただきました。この場を借りて感謝したいと思います。

今回および出来なかった多くの友人、インタープリターの先輩方、そして小林毅さんに、このような素晴らしい機会が持てたことを感謝するとともに、ワークショップの参加者が核となって、今後もインタープリテーションの分野が発展し、よりよい社会の実現に寄与していくことを願ってやみません。



ハワイ島で行われた
日米インタープリテーション研修会



日本のインタープリテーションの父
小林 毅氏

3. スケジュール

日米インタープリターズフォーラム スケジュール

●5月14日（日）

時間	内容	会場
12:30～	受付開始	新館フロント前
13:30～17:30	開会式・全体会 ●オープニング ●基調講演 Todd Hisaichi氏 （アメリカ国立公園局Park Ranger） Jack Spinnler氏 （元アメリカ国立公園局Interpretive Planner） ●日本のインタープリテーションの動向 西村仁志氏（環境共育事務所カラーズ代表） ●2日目の分科会の紹介&サインアップ	本館ホール
17:30～18:30	休憩・チェックイン	
18:30～20:00	夕食（立食）	新館レストラン
20:00～21:00	●スライド&トーク（日米インタープリテーションセミナー）	本館ホール
21:00～23:00	交流会	

●5月15日（月）

時間	内容	会場
6:00	早朝散歩 （希望者によるオプション・プログラム）	本館ボール・ラッシュ像前集
7:30～9:00	朝食	新館レストラン
9:00～11:30	●分科会 1. インタープリテーション・ベイシック 2. これからのインタープリテーションを考える 3. インタープリテーション計画を考える	新館ホール、アンデレホール
11:30～12:50	昼食（お弁当）	
12:50～15:00	全体会・閉会式 ●全体参加型パネルディスカッション ●クロージング ●記念撮影	新館ホール

4. プログラム内容

5月14日（日）

4-1 全体会

4-1-1 シンポジウムの様子報告

日本環境教育フォーラム 川嶋 直氏

前日に開催された「生物多様性と持続可能な観光シンポジウム～国立公園のインタープリテーションを考える～」(環境省、日本インタープリテーション協会主催)の報告が川嶋さんより行われました。

各登壇者による、日米両国の国立公園やインタープリテーションについての発表を聞いた後、参加者から質問を募り、書画カメラを用いて質疑応答の時間を取りました。ここではいくつかキーワードを紹介します。

Q. 日本のインタープリターたちと接して驚いたことは？

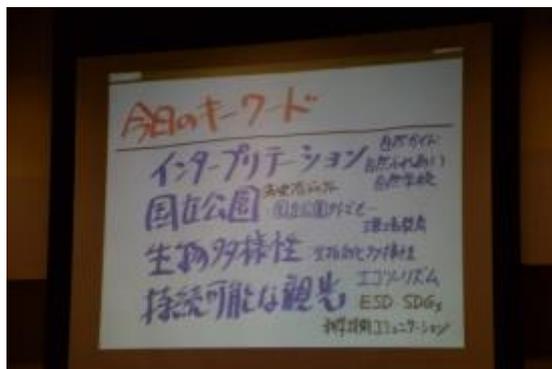
ー熱い思いが同じなこと／Enthusiastic（熱心であること）／Fun（楽しい、愉快的なプログラム）

Q. 今後の日本でのインタープリテーションの普及に必要なものを挙げるとしたら？

インタープリテーション計画／人材（プロとして活躍できる、認証制度や研修制度）／地域での理解／自然や文化の価値を高める／教材開発

Q. 魅力ある国立公園のためにインタープリテーションの果たせる役割は？

ー地域の誇り、地域自然の価値を高める／自然に近い生業の方々に光を当てる／国立公園が教室、実験場、道場、アトリエ…のような多様な学びの場になる／スター的インタープリター



4-1-2 旗揚げアンケート

フォーラム参加者層を知るために、旗揚げアンケートを行いました。「アメリカの国立公園への関わり」「今回の参加動機」等、質問に対して、1人1人が、1~5の番号が書かれた5色の札を挙げて回答します。回答結果がすぐに円グラフで表され、互いに互いを知る時間となりました。



4-2 基調講演

Todd Hisaichi 氏と Jack Spinnler 氏、西村仁志氏に基調講演をしていただきました。各講演内容を聞いた後、参加者は3~4人で1グループを作り、感じたことを話し合いました。その後、質疑応答時間とし、日米のインタープリテーションについて、ゲストの他、参加者からも意見をもらい、全員でインタープリテーションについて語り合う時間となりました。

以下に、各講演内容を箇条書きで記します。

4-2-1 Todd Hisaichi 氏「アメリカ国立公園のインタープリター」

動画：<https://www.youtube.com/watch?v=kQuNQ4qCEHY>

- ・アリゾナ州国立公園でのボランティア活動を機に、自然や文化財を保護するだけでなく、それを次世代に受け継ぐことの重要性を感じている。
- ・来園者が家に帰った後も、公園のこと、自然のことを考えてもらうことがインタープリターの仕事。
- ・インタープリターがたくさんいるといい→ボランティア、Jr.レンジャーをコーディネート。
- ・ミウアウッズ国立公園はゴールデンゲート国立保養地に所属。その南側にクリッシーフィールドという環境教育を行う場所があり、国立公園を利用してこなかった人たちを対象として、放課後にそこで体験学習を行っている。
- ・アメリカ内に417の国立公園のユニットがあり、そこには2万2千人のスタッフ、34万人のボランティアがいる。国立公園の目的は「保護」。

- ・日本にも国立公園があり、このような場で互いにつながっていくことで世界の自然を守る、世界公園局を作ることが可能。輪を広げていきたい。
- ・国立公園はみんなのもの、貧富も民族も関係なく、地球にいるみんなで守っていく。“ビジター”を“インタープリター”にしていく。
- ・そのために、公園に“来てもらう”だけではなく、公園を“持って行く”活動も行っている。



<質疑応答タイム>

Q. ボランティアの養成はどうしているか？

A. インタープリテーションについて理解してもらい、どうやって行うか、ミユアウッズ国立公園の自然や歴史のことを勉強してもらおう。実際にインタープリターがしている様子を見て覚えてもらう。

Q. なぜアメリカに行ったの？

A. 大きい世界を求めて旅行をした。オーストラリアやアメリカなど。訪れたアメリカの国立公園で神の声を聴いたから！

Q. レンジャーハットはどうやって持ってきたの？帽子ケースを見たい！

A. 専用のケースがあります！（写真右）



Q. 学校との連携について。具体的にどのような活動をされているのか知りたい。

A. インタープリテーション課の中に教育課という専門のレンジャーがいる。学校のカリキュラムに合わせたプログラムを行う。国立公園を教室として使ってもらっている。例えば、ゴールドラッシュのことを学校で学び、ミユアウッズ国立公園で体験学習できるようツアーを行う。

Q. アメリカにはボランティアで国立公園を渡り歩ける制度があるか？

A. トッドさん自身がそう。季節雇用から始まった。そこで経験を積んで公園局に入局。一番いいのはビジターとして渡り歩くこと。

Q. 国立公園がなぜ憧れの存在であるのか。

- A. 1916年にNPS(National Park Service)ができ、国立公園の制度が整った。国立公園はアメリカ人の誇り、財産。国立公園を訪問したり、保護したりすることはアメリカ人であることを実感できることにつながる。それに対して情熱を持って働くインタープリターは憧れの対象になるのではないか。以前、ビジターから「世界で一番いい仕事をしていますね。」と言われ、こう答えた。「あなたは世界で一番いいバケーションをしていますね！」

4-2-2 Jack Spinnler 氏「ハーパスフェリーセンターでのインタープリテーション」

通訳：山田菜緒子氏

動画：<https://www.youtube.com/watch?v=xXTS6Z1NfIE>

- ・32年間NPSに勤務。12年間は現場でパークレンジャーとして、20年間はインタープリテーション教育を担当。現在は退職し、地元メリーランド州フレデリックビジターセンターや米国メジャーリーグのボルティモア・オリオールズの野球場ツアーガイドの仕事もしている。
- ・先日、環境省のレンジャーからプレゼントをいただいた。今日は僕から次世代の日本のインタープリターたちにギフトを贈ります→参加者全員にバッジとポストカードをプレゼント
- ・司会者にプレゼントしたフラッグの背景を解説→自分の住んでいる地域の旗。アメリカ南北戦争で、地域が和解したことを示している。南北戦争時代、旗の黄色が北部、白色が南部を示し、住人はどちらかの色の旗を掲げ、南北にわかれていた。戦争が終わり、それらをまとめたこの旗が今、現在の旗。この旗からそういった歴史を解説できる。これでインタープリテーションをするのも私の仕事。
- ・このようにインタープリテーションは新しい情報だけではなく、そのものの持つ背景を伝え「へー！」「ほー！」と思わせることにも使われる。
- ・人が行うインタープリテーション（パーソナルインタープリテーション）には言葉、表情といったコミュニケーションはもちろん、メッセージをしっかりと伝えることが大事。そのために、どんなメディアを使うかが重要。
- ・インタープリテーション計画（IP計画）：それぞれの公園で行われるもの。詳細は分科会で。IP計画のワークショップは10~15人で、公園の将来について考えてもらう。進めるのがプランナーの役割。
- ・ハーパスフェリーセンターでの部門内容の紹介。
 - ・映像：フランスとネイティブアメリカンの戦争を再現するなど、公園の価値を伝える映画。何が起こっていたのか、歴史を伝えるメディア。
 - ・展示：博物館とビジターセンターの違いとして、博物館は訪れて見てその場所で完結するが、ビジターセンターは人々が訪れ、そこから外の世界（自然、歴史…）へと興味を持たせる場所。展示は情報をたくさん出したくなるが、簡潔かつ説得力のあるテキストを作製することが大事。
 - ・歴史・人文：アメリカでは、その時代を再現する部屋を作ることがある。例えば、ゴールドラッシュの時のアラスカの部屋を再現し、今では手に入らない昔の壁紙を再現するなど。
 - ・資源の保存・保管：未来につなげていくため公園資源を保存する。布、レンガ、イス、車など。もっとも面白いものは1900年代のカメラで、ライト兄弟を撮影した。

- ・印刷物：来訪者はどの情報源をもっとも使うか？
 - パークレンジャーから 10%、展示 20%、映像 25%、野外解説版 45%、印刷物 60%。
 - 来訪者の多くが、施設の地図を求める。
- ・野外解説版：ハーパースフェリーセンターに勤務している時に長く担当。ポイントは景色が見えるところに設置すること。文字は短く、説得力があることが重要。



<質疑応答タイム>

Q. 見てきた中で No. 1 だった展示は？

- A. ザイオン国立公園で見たもの。屋内ではなく、屋外の公園メインゲートにサインがあった。素材が丈夫で立体的であり、障害がある人（目の見えない人）でも触れると地形がわかる展示だった。

Q. 野外解説版で人を立ち止まらせるポイントは？

- A. タイトルがとっても重要。シンプルでキャッチーで考えさせるようなタイトルは来訪者の注意を惹くことができる。絵や写真を使うことも大事。

Q. メディア作成において重要視する点をいくつか知りたい。

- A. すべて言わないこと。来訪者の興味レベルに合わせて作ること。例えば、公園をさっと歩くだけの人（ストリーカー）、展示をざっと見ながら歩く人（ストローラー）、展示を一言一句読む人（スタディヤー）など来訪者タイプに合わせて作ること。

4-2-3 西村仁志氏「日本のインタープリテーションの動向」

- ・日本とアメリカの国立公園の比較 例) 土地所有、職員数
- ・NPS の紹介：NPS はアメリカの人たちを 1 つに結びつけた場所。19 世紀終わり～20 世紀始まりまで、アメリカには移民が多く“アメリカ人”という意識を持つ人は少なかった。NPS ができ、システムが確立したことで“私たちは素晴らしい自然を持っている”と、人々が国への誇りを持つようになった。さらに、パークレンジャーによってさまざまな身分、職業、人種の人々がその場や自然を共有できる

空間を作ってきた。

- ・日本では1980年代からインタープリテーション技法の確立と普及を民間が進めてきた（アメリカでは国が進めてきたところが違う）。
- ・自然公園だけでなく、博物館、動物園や水族館等の社会教育施設で「インタープリテーション」の役割が重視されてきたことが近年の動き。
- ・ESD、SDGs、生物多様性保全、地球温暖化、科学技術コミュニケーションなど、持続可能な社会を作っていく上でインタープリテーションの役割が大きく担っていくことだろう。

<参考資料>

論文「インタープリテーション活動の新しい展開」

<https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/22861/>

共同著書：インタープリタートレーニング：自然・文化・人をつなぐインタープリテーションへのアプローチ

<http://www.nakanishiya.co.jp/book/b185655.html>

動画：基調講演(西村仁志)/57' 06

https://www.youtube.com/watch?v=_xh9fnsWI0g&t=2901s



<質疑応答タイム>

Q. アメリカの行政システム、NPS を統括するところは？

A. 内務省。また、日本は自然と文化財の管轄がわかれているが、NPS ではその両方を管理している（歴史も含めて保護している、日本でいう文化庁の役割も担っている）。日本でいう環境省のような役割はアメリカでは環境保護局にあたる。

Q. インタープリテーション活動を行う前にする心得は何かある？

A. 一度、「素の自分」に戻って、なぜこの仕事をしているのか、使命を考える。（トッドさん）

A. ビジターとは一期一会。もう二度と訪れてくれないかもしれないから、最高のものを作る。そのた

めに、自分が今までしてきた中での最高だったプログラムを思い出してイメージトレーニングを行う。
(マイアさん)

A. 自分のことを見つめよう。多くのインタープリターは外交的だと思われるが、そんなことはない。外交的と言うのは他人からエネルギーをもらえる人。来訪者と触れ合うことで元気になれる人。逆に、内向的な人は他人と触れ合うことでエネルギーを取られる人（エネルギーをあげる人）。あなたはどちらのタイプなのか考えてインタープリテーション活動を行おう。(ジャックさん)

Q. アメリカにあって日本にないもの、日本にあってアメリカにないものは？

- A. ・NPS は国の土地で、全て NPS が管理している。警察業務、消防、道路管理、建設、施設管理…等あらゆる行政機能を NPS が行っているところが日本と違う。国立公園内は公園がある州の権限が及ばない。
- ・マンガで表現すること。
 - ・対象者理解の違い。インタープリテーション・プログラムを行う時に、日本の場合は、参加者がどう思っているか、どういう人かなど、対象者への意識が強いが、アメリカ人の場合はこの逆でインタープリターの主張（メッセージ）を伝えることに意識が強く、対象者理解が日本よりは低い。この意識の違いから、お互いに学ぶことが多くありそう。
 - ・日本にはゴミがない！

トッドさんの「アメリカで生まれ育っていない自分は、アメリカ人の考え方はわからないけれど、どこにも属していないということは、ニュートラルな存在であり、多様な民族が集まるアメリカ人たちをつなげる橋渡しの存在になれる」「インタープリテーション活動をするときに、自分がその地のものではないことをマイナスと思うかプラスと思うかは自分次第」という話を聞き、日本においても、生まれ育った地域ではない場所で何か活動をする時に、そこに完全に馴染めなくても、そういった考え（解釈）で活動をしていけばいいと、励みになった人が多いのではないかと思いました。

また、NPS で働くことで国籍を変えるという大きな決断の時に「人類の奉仕を考えたい」と思ったトッドさんはもちろん、ジャックさんやマイアさんの話からも、アメリカのインタープリターは壮大な使命感を持って活動されているということ、肌で感じた大変に刺激的な時間となりました。

4-3. 分科会サインアップ

基調講演の後は2日目の分科会紹介とサインアップを行いました。どの分科会も魅力的な内容で、各々、経験や学びたいことを踏まえての迷いながら選択となりました。

分科会1「インタープリテーションベーシック」

分科会2「これからのインタープリテーションを考える」

分科会3「インタープリテーション計画を考える」

4-4 シモダさんの手紙

夕食前に、日米インタープリテーション研修会の初期より関わっていただいた、元国立公園局職員 of ジェリー・シモダ (Jerry Shimoda) から、今回の日米インタープリターズフォーラムに宛てて送られた手紙を、マイアさんが一部読んでくださいました。シモダさんは国立公園局初の日系国立公園局長を務められた方です。下記がシモダさんから寄せられた手紙の全文です。

Dear Participants,

As interpreters in your parks or institutions, you are the most important persons in your organizations. Never forget that.

In your organization, you are the person who is in direct contact with the visiting public. You speak to more people than your boss, or the secretary in your office. You are in contact with hundreds, or perhaps, thousands of people in the course of a year.

You are the person, who is in a position that can gain volunteers' support through your behavior and programs, if they are done correctly, to offset some of the governmental or institutional funding shortages.

An interpreter needs to keep in mind what the Greek philosopher Plutarch said two thousand years ago, "the mind is a stone to be kindled; not a vessel to be filled."

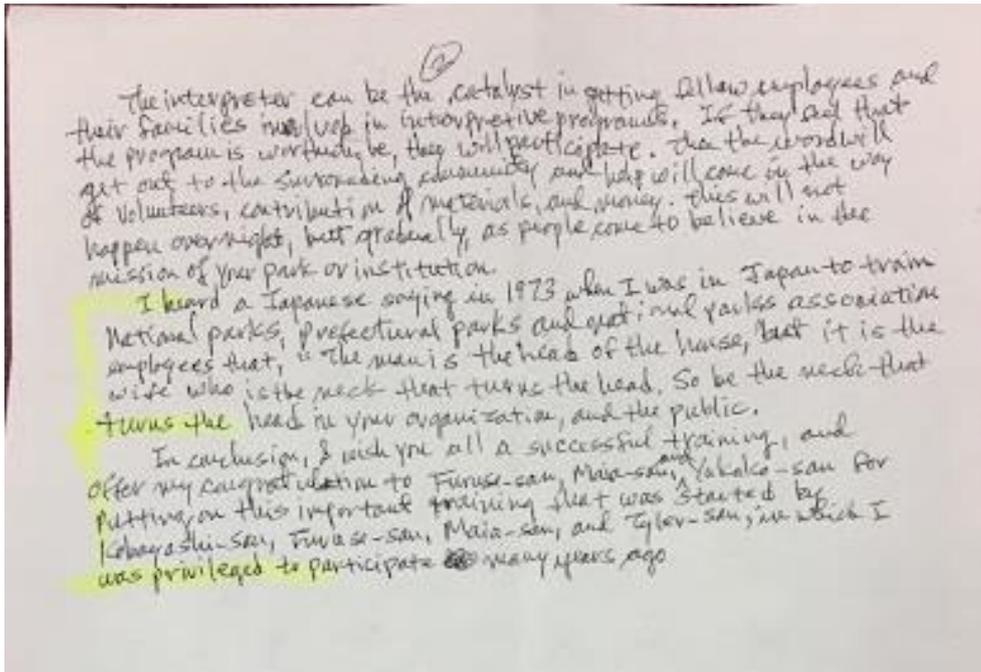
The public is not visiting your park or institution to hear how smart you are when you present your orientation or interpretive talk, so my suggestion is that you avoid using technical or academic language, but speak simply to get your message across to your visitors. From my experience, adults can enjoy talks being given to children, but children do not enjoy presentations for adults.

To get your message across to the visitors avoid technical, factual or statistical information that get in the way. Many times, the Roman statesman, Seneca, said 2,000 years ago, "if a man does not know what harbor he is sailing for, no wind is the right wind."

The interpreter's mission is to see that the visiting public has a learning and enjoyable visit, so much so that they will want to support your park or institution by helping physically, financially, or materially, or after election time. (Visitors also include government officials, at times).

In interpretation, demonstrations done by the interpreter is good, but visitor participation is better, as it gets them physically involved, and more so if they get to take something they made home.

An interpreter can also play an important part in getting the public involved in supporting a park or institution.



訳) 参加者のみなさまへ

公園や施設、組織のインタープリターとして働いておられるあなた方は、その公園や組織で最も重要な人です。そのことを決して忘れないでください。

公園や施設の中で、来訪者と直接接するのはあなたなのです。上司や秘書よりも、あなたの方がより多くの人たちに話しているのです。一年で何百人、いえ、何千人と会って話をしているのはあなたなのです。

正しくおこなえば、自分の行動やプログラムを通してボランティアからのサポートを増やしていける立場にいます。政府や組織・施設の資金不足を補ったりするためにそのようなサポートは助かります。

偉大な哲学者であるプルタルコスが2000年前に言った「心は満たされるべき器ではなく、焚き付けられる炎である。」という言葉、インタープリターは覚えておかなければなりません。

公園や施設に来る人々が、案内や情報をもったりインタープリテーションを受けたりしているときに、あなたがどんなに頭が良いのかを聴きに来ているわけではありません。ですから、私が助言したいことは、専門用語や学術用語を使うのを避けて、伝えたいメッセージを簡単に伝えるようにしてください。私の経験から言えることは、子ども向けの話は大人も楽しめますが、大人向けのプレゼンテーションは子どもには楽しめません。

メッセージを来訪者に伝えるためには、専門的で、事実や統計情報を使うのを避けるべきです。ローマ帝国の優れた政治家であったセネカが2000年前に言ったように、「もしどの港に向かって航海しているのかを知らなければ、適した風などないのです。」

インタープリターの使命は、公園を訪れている人が学んで、楽しい経験をするようにすることです。手伝いや物質的な援助、金銭的な援助、物品の提供、選挙後（来訪者には政府関係者もときにはいます）などに公園や施設を支援したいと思ってもらうことです。

インタープリテーションでは、インタープリターによるプレゼンテーションは良いものですが、来訪

者に参加してもらうことは、来訪者を巻き込むのもっとよいものです。そして、何かしら大切に思うものを持ち帰ってもらうものはさらに良いものです。

公園や施設を支援・応援するのに人々を巻き込むのにも、インタープリターは重要な役割を果たせます。

インタープリターは、同僚や家族をインタープリテーション・プログラムに参加させる媒体者にもなります。同僚や家族にプログラムの価値を感じてもらえれば、参加してくれます。評判を周囲に広めてもらえ、ボランティア、物品の提供やお金という形で返ってくるでしょう。これは一夜で起こることはありませんが、公園や施設のミッション（使命・目的）を十分に理解してもらえるようになれば少しずつ実現していきます。

私が1973年に日本で国立公園、県立公園、国立公園協会の職員を対象に研修をおこなったときに聞いた言葉があります。「男性は家の頭部（長）であるが、その妻が頭部の向く方向を決める首である。」ですから、あなたが、組織と人々の頭の向きを変える首となってください。

最後に、日米インタープリター研修会の成功をお祈りしています。小林さん、古瀬さん、マイアさん、タイラーさんが始めたこの重要な研修のこれまでの成功に対して、古瀬さん、マイアさん、由香子さんに、お祝いを申し上げたいと思います。昔この研修に関わられて大変光栄に思います。

4-5 スライド&トーク 「これまでの日米研修のいろいろエピソード」

古瀬浩史氏、Maia Browning 氏、増田由香子氏

このセッションでは、インタープリテーション研修会 20 年の歴史をスライドで紹介しました。マイアさんは第 1 回から全て関わっていますが、実は本研修は前任者が故小林毅と話を進めており、マイアさんは何も知らなかったそうです。着任日に机の上に「日本と研修を行うからよろしく」とメモがあっただけで、全く背景がわからない状態でいきなり担当になって焦ったとのこと。研修当日は、夜に到着する日本人たちを「本当に来るの？」と心配でたまらなく、公園入口の暗い中で目を凝らして到着を待ちわびたといった裏話を教えてくれました。

日米両国とも不安の中で始まった研修でしたが、マイアさん自身も日本人の愉快的な発想に刺激を受け、それからは今日まで 20 年間続けて互いにインタープリテーションについて学びあってきました。途中、日米研修の参加者からも愉快的な思い出話が飛び出し、会場は笑いあふれる場となりました。毎回の研修内容も興味深く、参加経験のない人は「ぜひ行ってみたい」、参加経験者も「久しぶりに参加したい」と思える、20 年のふりかえりとなりました。



プログラム内容 2 日目

1 分科会

2 日目は3つの分科会にわかれて実施しました。ここでは、各分科会の内容を箇条書きにして報告します。

1-1 分科会 1 : インタープリテーション・ベーシック

実施概要

○参加者 : 16 名

○対 象 : 主にインタープリテーション初心者

○講 師 : Maia Browning : アメリカ国立公園局 (US National Park Service) でインタープリターとして働き始めた後、展示や博物館管理の仕事を 15 年、その後、研修開発部で職員研や新任所長アカデミーでのトレーニングを担当。

森美文 : 丹沢大山国定公園の宮ヶ瀬ビジターセンターや明治の森高尾国定公園ビジターセンターでインタープリターとして勤務。その後、独立し、森環境教育事務所設立。

増田直広 : 総合司会。キープ協会で環境教育事業に関わり、主に環境教育指導者養成事業や企業との協働プログラムを担当。都留文科大学、関西学院大学等非常勤講師。

増田由香子 : 通訳。第 6 回から日米インタープリテーション研修に通訳として参加。

松下由実 : 通訳。2005 年にカナダ・アルゴンキン州立公園でインタープリターとして活躍。

○動画 : 第一分科会 (1/3) (55' 57) <https://www.youtube.com/watch?v=ma4meqAD-Tk>

第一分科会 (2/3) (1' 06' 46) <https://www.youtube.com/watch?v=oUb-ZcRx18o>

第一分科会 (3/3) (29' 27) <https://www.youtube.com/watch?v=7vJ5j9AFYQE>

内 容

1. 参加者動機の確認 (第一分科会 1/3 : 06' 40~20' 00)

A4 用紙に名前と分科会で学びたいこと・得たいことを記入し、紹介しあった。

2-1. インタープリテーションとは? (第一分科会 1/3 : 21' 01~55' 57)

ガイダンス、インストラクション ⇒インストラクター: 見えるものを見るままに伝える人

インタープリテーション ⇒インタープリター: 見えるものから見えないもの・ことを伝える人

ファシリテーション ⇒ファシリテーター: 参加者を進ませたい方向へと舵取りする人

2-2. インタープリターにとって大事なこと

- ・プログラムには目的 (ねらい)がある。参加者にどうなってもらいたいのか? ゴールを決める。
- ・参加者の気持ちを動かすには知識はもちろん、“自分の想い”が大事。
- ・自身が体験したこと、感じたことが参加者に伝わる。まずは自分が行動。
- ・物の見方が大事。人それぞれ見方が違う。(第一分科会 2/3 : 0' 00~11' 25)

- ・見る切り口を変える。形、時間軸、大きさ…など。例) ウサギの足跡
- ・笑顔!
- ・先輩、後輩関係なく、プログラムを評価し合う

* 参考資料

Tilden, F. (1957) *Interpreting our heritage*. Chapel Hill, NC: The University of North Carolina Press

インタープリテーションの原則

(チルデンの6つの原則)

(Tilden's Six Principles : Interpreting Our Heritage, 1947)

1. インタープリテーションは、ビジターの個性や経験に関連づけるとよい。

Any interpretation that does not somehow relate what is being displayed or described to something within the personality or experience of visitor will be sterile.

2. 単なる情報伝達はインタープリテーションではない。インタープリテーションは情報に基づいて新しい世界を開いて見せること(啓発)である。インフォメーションとインタープリテーションは全く異なるものである。しかしながら、全てのインタープリテーションは情報を含んでいる。

Information, as such, is not Interpretation. Interpretation is revelation based upon information. But they are entirely different things. However, all interpretation includes information.

3. インタープリテーションは素材が科学、歴史、建築の分野であれ、様々な技能を組み合わせた一つの技能(技: art)である。技能であるからには程度は教えることができる。

Interpretation is art, which combines many arts, whether the materials presented are scientific, history or architectural. Any art is in some degree teachable.

4. インタープリテーションの第一の目的は教えることではなく、啓発することである。

The chief aim of interpretation is not instruction, but prebivation.

5. インタープリテーションは部分的ではなく、全体像を示すようにすべきである。そして、相手の一面だけでなく全人格にはたらきかけるべきである。

Interpretation should aim to present a whole rather than a part, and must address itself to the whole man rather than any phase.

6. 子ども向け(12歳くらいまで)のインタープリテーションは、大人用のものをやさしくしたものではなく、全く異なる方法が考えられなければならない。最大の効果をあげるには、別のプログラムが必要である。

Interpretation addressed to children (say, up to the age of 12) should not be a dilution of the presentation to adults, but should follow a fundamentally different approach. To be at its best it will require a separate program.

3. インタープリテーションで大事にしていること～マイアさんの経験をふまえて～（第一分科会 2/3 : 20' 50～46' 50)

- ・情報収集したものを一気に全て出したいが、それはインタープリテーションではない！
- ・フリーマン・チルデン
インタープリテーションを通して、人々の理解を得る
理解を通して、感謝の念を持つ、
感謝の念を持つことを通して、資源を守る
- ・インタープリテーションは教えることではなく、つながりをつくること
- ・あなたがガイドウォークすることになったら……、
まずは、参加者とやりとり。そしてフィールドの安全確認。
テーマ、目的、目標を設定する
ガイドルートの確認。どこで何を話すのか。何をするのか。
⇒どのポイントも全体テーマ（ねらい）に沿っていること。
- ・計画だけで終わらず、練習！練習！練習！
同僚に参加者になってもらい実際にやってみて、評価をもらうことがすごく大事。（peer to peer coaching）
- ・実施したプログラムがうまくいったか確認として、参加者の声を聴く。
- ・参加者に語ってもらう（参加者に主体的に参加してもらう）。
- ・インタープリターは知識もあり、伝えたいこともあるが、沈黙も大切。
- ・NPSの新しい手法。Facilitated interpretation。
参加者でグループトーク⇒互いにシェアすることでそれぞれが持つ背景や考え方を共有。
- ・Facilitated interpretationは管理が大変。たくさん話す人もいれば、シャイな人も、人種も違う。
この手法は、その場にいる対象者に合わせて変えていく。むいてなさそうであれば無理に実施しない。
- ・ライブ感=その場やその時の参加者に合ったベストな手法を選ぶ=インタープリター冥利に尽きる！

4. NPSのインタープリテーショントレーニング内容（第一分科会 2/3 : 46' 50～1' 06' 46)

4-1. 歴史

- ・1950-1960s 求められていたものは知識。“パークヒストリア”“パークナチュラリスト”。
- ・1970-1980s コミュニケーションスキルを求められる。“パークインタープリター”に。
- ・1990s リソースとコミュニケーションのバランスを取るように。

4-2. コンピテンシーズ Competencies

- ・コンピテンシーズ=技術+知識+能力
- ・ユニバーサルコンピテンシーズ
=NPSのミッション、歴史、運営システムなど、国立公園で働く全職員が身につけておくもの、知っておくこと。
それぞれの部署の人が他の部署のことも知れることがとてもいい。組織の風通しを良くして、相互理

解をととても大事にしている。

- ・ マスターインタープリター（経験を積んだインタープリター）に必要なコンピテンシーズ。
 - ① 国立公園のミッション（保全保護＋利用）を満たしている。
 - ② プログラム以外の時にもビジターとコンタクトをしっかり取れる。
 - ③ プログラムの計画、準備、実施をする。
 - ④ インタープリテーションのデモンストレーションを計画でき、実施する。
 - ⑤ 印刷物を作る。
- …など、項目がいくつかあり、それができていること。

4-3. インタープリターとして成長するための様々な方法

① セルフスタディ

インターネットでアクセスできるリソース「Interpretive Development Program idp.eppley.org (idp.epply.org)」。NPS の教材は豊富でオープンリソース。

② 同僚同士のコーチング (peer to peer coaching)。

NPS ではネット上で他施設のインタープリターと情報交換やディスカッションができるシステムがある。

③ OJT (On the Job Training)。

④ スーパーバイザーとの定期的なミーティング。

⑤ エキスパートからのアドバイス

5. Q&A (第一分科会 3/3 : 1' 00~23' 30)

Q. 評価はどうやって行う？

- A. 1) スーパーバイザーが参加者に混じって評価する。評価項目があるので、それに沿って行う。
2) 学校グループを対応した後は、学校に帰ってから生徒に学んだことや感想を書いてもらう。

Q. マネージメントが大事だと言ったが、それに関するテキストなど学ぶものがあるのか？

A. テキストもあるしトレーニングもある。

Q. facilitated interpretation の事例は？

A. ファシリテーションの技術を使って参加者の声を引き出すことをプログラム中に行う。

日本でもファシリテーション型インタープリテーションというものがあり、人間関係トレーニングとして考えられている。

その中で大事な3つの要素

① 観察する

② 待つ

③ 働きかける

6. 最後に… (第一分科会 3/3 : 23' 30~29' 26)

- ・初心者だけでなく、経験者にとっても基礎が大事だと感じる会であった（増田）。
- ・原点に返ることが大事。プログラムの対象は人間で毎回反応が違う。そこが面白い。そこに興味を持つ人はこの世界に向いている。原点に返ることは大切で「私は何をやっているのか」と考えて活動をするのがいいインタープリターになること（森）。
- ・パークインタープリターとして、マスターインタープリテーションになっていくことは日々満足できる仕事。パーソナル・インタープリテーション以外に、ノンパーソナル・インタープリテーションにも挑戦してみてください。これからの新しいみなさんにお会いできることを楽しみにしています。（Maia）



1-2 分科会 2：これからのインタープリテーションを考える

実施概要

- 参加者：18名
- 対象：主にインタープリテーション経験者
- 講師：Todd Hisaichi：NPSのレンジャーになる夢を叶えるため、2004年に市民権を取得。グランドキャニオン国立公園を始め、全米各地の国立公園で勤務し、現在はミューアウッズ国立公園にてインタープリターとして活躍中。
林浩二：千葉県立中央博物館勤務。持続可能な社会のための教育（ESD）と博物館が研究課題。
高田研：森林文化アカデミーで教鞭を奮った後、都留文科大学教授に。アカデミーの観点から学生が都留市の自然や地域文化に携わる様々な活動をサポート。
西村仁志：総合司会。環境共育事務所カラーズ代表。環境学習・市民参加まちづくりのコーディネート、コンサルティングや研修会、イベント等の企画運営を行う。広

島修道大学人間環境学部教授。

○動画：第二分科会 1/3 (32' 18) <https://www.youtube.com/watch?v=51vtbqkkFmQ>

第二分科会 2/3 (20' 58) <https://www.youtube.com/watch?v=fN-oLF1zmVw>

第二分科会 3/3 (38' 00) <https://www.youtube.com/watch?v=kZ6CNcY52Fc>

内 容

1. ねらいの共有 (第二分科会 1/3 : 00' 00~)

これまでインタープリテーション活動をしてきた人たちで、これからのインタープリテーションにどのような役割があるか、どのような可能性があるのか考える。

2. SDGs を使ったアイスブレイク (第二分科会 1/3 : 01' 10~)

- ・ SDGs とは

http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

- ・ 5人1グループになる。SDGs17項目の内、自分が関心のあるものを1つ取って自己紹介。
- ・ グループで17項目に順番をつける。先進国2グループ、発展途上国2グループ。

3. 情報提供 (第二分科会 1/3 : 19' 16~)

3-1. 西村仁志氏「インタープリテーションと社会(変革)」

- ・ これからのインタープリテーション：地域を担う人づくりに貢献する重要な手法
- ・ 事例紹介：同志社大学大学院 内山さんの研究

「伝統行事・伝統芸能をツールとした地域活性化の実践的研究ー鹿児島県・徳之島をフィールドとしてー」

<要約>

島には高校も仕事もなく、次の担い手となる若者が少ない状態である。水田がなく、サトウキビ畑ばかりだが、稲作の中で生まれた島唄や踊りが残っている。昔は島にも水田があったのだが、薩摩藩の統治における税金や減反政策でなくなってしまい、歌や踊りが形骸化していた。この島唄を使って島を活性化できないかと思い、まずは水田を作るところから島の人たちと始めた。田植えの時には子どもたちや民謡保存会の方が集まり、また、歌が唄われるのが40年ぶりと言うことで新聞社も集まり、大賑わいとなった。田んぼ作業がない時は自然観察をすることで、子どもたちや学校の先生たちにとっての学びの場となった。収穫・脱穀の時は昔の道具や島で使っていた言葉が復活した。「もちたもれ」というお祭りも自分たちで育てた米を使うことで、例年よりも盛り上がった。こうしたことで島の人たちがアイデンティティを確認したり、元気づけられたりして、将来的に若い人たちを呼び寄せられる可能性があると考えた。

3-2. 林浩二氏「インタープリテーションとSDGs」(第二分科会 2/3 : 00' 00~12' 24)

3-2-1. 博物館や科学館など教育施設の社会的立ち位置の変化

- ・博物館の定義：有形＋無形＋景観⇒エコミュージアムやジオパークに近づいてきた
- ・UNESCO 博物館 2015 勧告：博物館が持続可能な発展やそのための教育にどう関わるか
- ・メヘレン宣言：科学館がとりくむ SDGs と市民参加

3-2-2. SDG 持続可能な開発目標

- ・2030 年までに達すべき、17 の目標と 169 のターゲット。
- ・開発途上国、先進国の区別なく適用
- ・すべての項目が並んで達成できることはない。どれかが立てばどれかが立たないこともありうる。そういう見方も必要。
- ・世界科学館・科学博物館の日で SDGs のいずれか 1 つ以上を選んでイベントを実施することを推奨
⇒今日はインタープリテーション(普段の自分たちの活動)と SDGs を結び付けよう！



3-3. Todd

(0' 58)

- ・今まで(
 - これからのインタープリター→ 参加者ひとりひとりが主体となって考えられるよう手伝う立場
- ・地球温暖化のような環境、貧困、人権…様々な問題のどれが大事なのか、ディスカッションをするのではなく、ダイアログ(参加者同士の対話)を行う。

4. Q&A (第二分科会 3/3 : 0' 00~25' 40)

- Q. ダイアログの中で、出てきた答えが予想していたものと違っていた時にどうするのか。また根っこの部分(考えの土台となる想い)を共有できていない時にどうするのか。
- A. 新しい手法なので、まだ研究中。ミュアウッズ国定公園で行っている 15 分トークの例でいうと、これからのことを考えてもらうような質問を投げかける。例えば、恐竜時代からいた木がどうしてなくなったと思う?そこから考えてこれから 50 年後、100 年後にここはどうなっている?…など。レンジャーから教わるのではなく、参加者自身で学び合う。落としどころはない。ダイアログの前に話し合いの条件を作る(コミュニティ作り)ことが大事。

—美術館でも対話型鑑賞を行っていて、そういう本も出ているので参考にしてみてもは。

Q. アウトリーチの具体的な内容を知りたい。

A. アウトリーチはその地域に合わせたインタープリテーションの仕方。例えばヒスパニック系のコミュニティに出向き、英語ではなく、その言葉でその方たちの生活に合った形で話す。そこでアメリカの国立公園の意味や未来のことを考えてもらう。コミュニティには戦略的にこちらから出向いていく。

5. アクティビティ「自分の活動とSDGsを結びつける」(第二分科会 3/3 : 25' 40~32' 21)

- ・ピンク(地域の課題、問題)を書くことが、トッドさんが言っていた「参加者に考えてもらうこと」と結びついた。
- ・事業整理になった。伝えるだけがインタープリテーションではなく、みんなで考える場を作ることもインタープリターの役割だとわかった。また、自分の想いをSDGsに結びつけることで、個人の願いだけでなく、社会的に大事なことであることがわかり励みになった。



6. 最後に…(第二分科会 3/3 : 32' 25~38' 00)

高田さんよりコメント。

そもそも施設や公園にはミッションがあるが、多くの施設で様々なアクティビティが先行している。もう一度、ミッションを考え、それとアクティビティをつなげて活動していくことが大切。



1-3 分科会 3 : インタープリテーション計画を考える

実施概要

○参加者 : 13 名

○対 象 : インタープリテーションの実践だけではなく、公園や、施設、組織の管理や運営を担う、少し上のレベルの中上級者

○講 師 : Jack Spinnler : 国立公園局 (US National Park Service) のインタープリテーション専門部門であるハーパーズフェリーセンターにて、長年インタープリテーション計画に携わってきた

古瀬浩史氏 : 日本国内の国立公園や植物園などでインタープリテーション計画の作成を主にしてきた。帝京科学大学教授、インタープリテーション協会代表理事。

山田菜緒子 : 総合司会。アメリカの大学院でインタープリテーションを学ぶ。

○動画 : 第三分科会 (1/3) (37' 19) https://www.youtube.com/watch?v=6fJR8bpqP_0

第三分科会 (2/3) (52' 26) <https://www.youtube.com/watch?v=mzsYpMacUGk>

第三分科会 (3/3) (51' 05) https://www.youtube.com/watch?v=Z4Q_u8KjR24

内 容

1. 概要

日本での実践例がほとんど見られず、その呼称さえ普及していない「インタープリテーション計画」に焦点を当てた。インタープリテーション計画は、インタープリテーションを使って、その公園、施設や組織をどう効率的に効果的に運営していくかを考えることでもある。参加者には、それぞれの活動場所で作成できるインタープリテーション計画を考えてもらう機会とした。

2. インタープリテーション計画とは何かについて

スピナー氏より以下を説明してもらった。

- ・ インタープリテーション計画の必要性と重要性
- ・ プランナーの役割とファシリテーションの重要性
- ・ 計画を作成する際に気をつける点や難しい点
- ・ インタープリテーション計画の成功事例
- ・ アメリカ国立公園局における公園全体計画 (General Management Plan) の枠組みを紹介しながら、インタープリテーション計画の位置づけ

古瀬氏からは、以下を紹介してもらった。

- ・ インタープリテーション計画の国内事例やどのような結果が見られたか
- ・ 公園・施設管理計画との関係の中で、インタープリテーション計画の構成要素でもある、「公園・施設の目的」、「資源の重要性」がどのように決められるのか
- ・ インタープリテーション計画の構成要素 : 「インタープリテーションのテーマ」、「来訪者」、「インタープリテーションのメディア」これら要素の組み合わせについて事例

3. 参加者によるちょっとしたグループワーク

- ・短時間ではあったが、参加者にインタープリテーション計画の要素のいくつかを考えてもらう時間をとった。
- ・少人数のグループに分かれて、特定の施設・組織について、インタープリテーションのテーマ、来訪者、メディアの組み合わせを考える。
- ・それぞれの施設や組織での課題や事例を紹介し合い、疑問を話し合った。

4. Q&A

- ・マーケティングとインタープリテーション計画の違いは？
- ・公園や施設、組織運営におけるインタープリテーション計画の位置づけについて
- ・インタープリテーション計画作成の外部委託と、作成メンバーに関して生じる問題

5. 最後に…

本分科会では、参加者による演習・ワークよりも、インタープリテーション計画の概念や枠組みに馴染んでもらうことに重きを置いたため、ワークショップというよりも参加者から質問を受けたり、専門家（スピーカー）から説明や提案をしてもらったりする時間となりました。それでも、おそらく国内初のインタープリテーション計画を話題とした時間でもあり、経験豊かな中級・上級のインタープリテーション関係者にとっては、今後の発展につながる情報が得られたのではないのでしょうか。

参加者それぞれの活動場所でのインタープリテーション計画について、これまで何が行われ、これから何をしていけるかを考えてもらう機会となれば嬉しく思います。

6. 参考資料

アメリカ国立公園局発行の Comprehensive Interpretive Planning を基にしました。

英語版：<https://www.nps.gov/hfc/pdf/ip/cip-guideline.pdf>

日本語版：<http://www.interpreter.ne.jp/wp1/wp-content/uploads/2013/05/CIP-J.pdf>



2. 全体会

1. ふりかえりー全員参加型パネルディスカッション

○動画：まとめ全体会（51' 31）<https://www.youtube.com/watch?v=hwqBDOBqBR0>

全員参加型のパネルディスカッションを行い、各分科会をふりかえった。

- ・分科会 1、2、3 から 1 名ずつ集まり 3 人 1 グループを作る。
- ・各分科会に関連するテーマが出され、それについてグループで話し合う。
- ・パネリストは分科会担当委員の他は、小グループから募集。
- ・最後に分科会担当者から各分科会の簡単な報告。

分科会 1：インタープリテーション・ベイシック

テーマ 1「あなたが、インタープリテーションで大切にしていることは何か」（動画 14' 24～）

ーパネリストより

- ・メッセージと効果：やっていることの想いやメッセージの確認と、それがどういう効果があるか。
- ・素直：ありのままに自分が感じたこと、相手を感じたことを素直に感じる。
- ・気づきを大切にす：自分から情報発信をするのではなく、参加者の気づきを手伝う。
- ・普段着 生き方：インタープリテーションやインタープリターが特別なものではなく、生き方。

分科会 2：これからのインタープリテーションを考える

テーマ 2「インタープリテーション（インタープリター）は、これからの社会をつくるために、どのような貢献ができるでしょうか」（動画 25' 58～）

ーパネリストより

- ・はなれてしまったモノと人をつなぐ：森と人など。
- ・interpretise：全てにインタープリテーションする物語がある：
いろいろなものの物語を作り、それが自分とどう関わっているのかを伝え、豊かさを感じる。
- ・“幸せ”とは何か、自ら気づくことができる人を増やす：
一人一人が“幸せとは何か”を考えたり見つけられれば、いろいろなことがつながってくる。
- ・市民参加で社会を変えていく：自ら考え判断し、行動する市民を増やしていく。

分科会 3：インタープリテーション計画を考える

テーマ 3「インタープリテーション計画にどう取り組むか、何から始めるか？」（動画～41' 23～）

ーパネリストより

- ・今の計画を見るーミッションは？公園にとって良いこと？：
まずは今ある全体の計画を確認。公園のミッションは何かを現場のスタッフ全員で把握する。
- ・インタープリテーション業界のインタープリテーション計画：

20年後の将来を考えてインタープリテーション業界全体の戦略を練る。

- ・ 価値（資源）をスタッフと共有する：

その土地に関連する人たちと一緒に価値を掘り起こして共有する。

- ・ インタープリテーション計画に感心がある人＋インタープリテーションに影響を与えそうな人を考える（リストアップする）

2. まとめ

○動画：まとめ（川嶋直）（5' 44） <https://www.youtube.com/watch?v=sffy5DJy1IU>

川嶋氏より KP 法を用いて全体のまとめが行われた。

- ・ 日米のレンジャーやインタープリターが関係を持つことで、アメリカ型、日本型の手法が共有・一般化され、それが他国のためにもなっていく

⇒世界にとって意味のある交流

- ・ インタープリテーションを受けた人がインタープリターに⇒世界中が自然を大切にする公園になっていく

- ・ dialog（対話）の機会を作る⇒参加者の次の行動につながる。誰かに話す、自分で調べる…など。

- ・ インタープリター＝自然と人を結びつける＋人と人をつなぐファシリテーター

- ・ 情報を伝えるよりも、動機を喚起する



○動画：今回の日米 IP 関係者交流のまとめ（川嶋直）：（2' 11）

<https://www.youtube.com/watch?v=VnuP0v84NR4>

今回のフォーラムにより、アメリカの National Park Service と日本の環境省との新しく、しっかりとした関係が動き始めた。それをつないだのが日本インタープリテーション協会であり、今回のシンポジウム・フォーラムはそれら 3 つの新たなつながりが始まった 4 日間であった。ゲストの 3 人に深く感謝の意を伝えたい。

おわりに

アメリカ国立公園局のゲストを迎え、日本の大勢のインタープリターが交流し、現在の課題や展望を共有する機会は非常に有意義なものでした。改めてインタープリテーションについて考えさせられ、自分の足元を見直し、気持ち新たに前を向ける時間となり、有意義な2日間となったと思います。

はるばる日本に来てくださり、話を聞かせてくださった Maia Browning さん、Jack Spinnler さん、Todd Hisaichi さんに深く感謝いたします。また、助成をくださった公益社団法人 損保ジャパン日本興亜環境財団、後援をいただいた環境省、共催である KEEP 協会、ボランティアで活動してくれた通訳や運営スタッフのみなさま、そして参加者のみなさまに、素晴らしいフォーラムが開催できたことを感謝いたします。

日本インタープリテーション協会